Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-06

近世日本の相場指南書 ： 大坂米市場を素材として

高槻, 泰郎

(Citation)
国民経済雑誌,208(5):65-79

(Issue Date)
2013-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81008520

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008520

近世日本の相場指南書

——大坂米市場を素材として——

高　　槻　　泰　　郎

国民経済雑誌　第 208 巻　第 5 号　抜刷

平 成 25 年 11 月

近世日本の相場指南書

――大坂米市場を素材として――

高　槻　泰　郎

近世日本の相場指南書は，迷信に基づく俗説なども含むことから，学術研究の対象となることは少なかったが，本稿では，当時の市場参加者の市場観を豊かに伝える素材としての意義を見出し，検討を加える。大坂において作成された相場指南書の内，18世紀中頃に作成されたものを特に取り上げて比較検討を行った結果，当時の市場参加者は，人力の及ばないものとしての「天」が，市場の高下を究極的に支配すると観念しつつ，一時的には「人気」なるものが相場を動かすこともあり得ると考えていたことが明らかになった。ここで「天」が定めるものとして，具体的に想定されていたのは米の豊凶である。同じく米価に影響を及ぼすと考えられる需要の変化や，耕地面積，反収，生産技術など，米生産力の変化について，全く言及がなされていない。これらをあたかも所与にして不変と捉えていることも，当該期における市場観の一端を示すものとして特筆に値する。

キーワード　　大坂米市場，堂島米会所，先物取引，金融市場

は　じ　め　に

現存する中では最も古い年代に作成された相場指南書に，「諸商売の相場，おほくは大坂をもって根本とす，人のよくしることなれば，ここにくだくだしくしるさず」とある[1)]。この記述は，本稿が大坂米市場を素材とする理由を代弁する。価格がどのような要因（情報）によって変動するか，あるいはどのような法則に基づいて運動しているかについて構造化された観念を，本稿では市場観と称するが，近世の段階から「くだくだしく」記す必要もなく，諸相場の根本と見なされた大坂米市場を素材として，近世人の有した市場観を検討することが本稿の課題である。

主として西日本諸藩，日本海沿岸諸藩の貢租米を集散した大坂米市場にあって，その中枢に位置したのが堂島米会所であった。享保15年（1730）に幕府の公許を受けた大坂の堂島米会所では，諸大名が貢租米販売に際して発行した米切手を取引する正米商内（しょうまいあきない）（スポット取引）と，1年を3期に分かち，各期毎に代表取引銘柄を選定し，それを原資産として取引をする帳合米商内（ちょうあいまい）（先物取引）とが並行して行われた（宮本（1988））。この内，帳簿上で売りと買いを相殺する差金決済に依った帳合米商内は，「此（この）帳合商や，蟲入・升減・蔵敷の責もなく，

利にあたれば計(はかり)なき富を得る事，実に宝の市といふべし」（「商家秘録」169頁）との記述が示す通り，米の劣化や保管費用を気にかける必要のない取引であり，うまくいけば大きな富を得る「宝の市」と見なされていた。

幕府の公認後，堂島米会所を舞台とする投機取引，特に先物取引における投機が活発化し，参加者の裾野が広がっていく中で生まれてきたのが相場指南書である。相場指南書とは史料上の呼称ではなく，筆者が名づけたものである。市場参加者，あるいは市場に参加しようとしている者に対して，取引に際しての心構え，取引戦術，相場の専門用語，価格の運動法則，価格の予測方法などを示したものを，ここでは相場指南書と定義している。

安政２年（1855）より文久元年（1861）まで大坂町奉行を務めた久須美祐雋(すけとし)は，その著「浪華の風」において大坂の風俗や文物を紹介し，米市場にも触れているが，「およそ米相場のことを書るものは，秘書と称して世間にも流布せしものあれば，そのつまびらかなることはその書に譲りて，ここに贅せず」として，詳述を避けている（早川編（1929）334頁）。秘書が流布するとは面妖だが，現代においても指南書とはそうしたものであろう。ここで着目すべきは，久須美があえて大坂米市場の詳しい説明を与える必要のない程，幕末には相場指南書が流布していたという事実である。市場参加者の裾野が相当程度に広がっていたことを窺わせる。

こうした相場指南書の中には，迷信に基づく荒唐無稽な叙述を含むものも多く，学術研究の分野においては，部分的に利用されるにとどまってきたが，少なくとも以下に掲げる２点において学術的価値を有する。第一に，市場における取引規則を知るための有力な素材としての価値である。本稿が取り上げる相場指南書が念頭に置いているのは，堂島米会所におけるスポット取引，先物取引であるが，これらについて，現代の証券取引所が公開しているような定款，規則，内規の類が，当時において作成された形跡はない。このことは，市場参加者の裁量，あるいは慣習という名の不文律に多くを依存して取引が行われていたことを示唆しているが，それだけに，たとえ断片的であっても取引規則を紹介している相場指南書の意義は小さくない[2)]。

第二に，公的な記録文書には表れにくい，当時の人々の市場観を雄弁に物語る素材としての価値である。大坂町奉行所の諮問に答える形で，米商らが提出した書付などは，市場に関する情報を豊富に含む有力な素材であるが，市場の動きをどのようなものとして観念しているのかについて伝えるものではない。近世の人々は，近代経済学を物差しとして市場を眺めている我々とは異なる観点を有していたと考えるべきであり，たとえそれらが科学的検証に支えられたものでなくとも，観察すること自体に意義があると言えよう[3)]。

以上を踏まえた上で，本稿が着目するのは上記に掲げた学術的価値の内，第二の側面である。第一の側面については，既に先学によって見出されており（宮本（1988）など），近年

では筆者も堂島米会所の取引制度復元に際して活用している（高槻（2012a）第2章）。一方，第二の価値については，断片的に参照・利用されてきたに過ぎないため，新たに検討を加える余地は十分にある[4)]。

もとより，現存する全ての相場指南書を網羅することは，筆者の能力的にも，紙幅からしても限界がある。また，一括りに相場指南書といっても，執筆者の属性，執筆の意図，成立年代には幅がある。そこで本稿では，現存する相場指南書について，その属性を整理することから作業を始め，後考のための足場作りをする。その上で，代表的な相場指南書の中から，当時の市場参加者が有した市場観を読み取り，一定の共通認識を抽出する作業に移る。

なお，ここで市場参加者として念頭に置くのは実需家ではなく，投機家であることを断っておく。近世の相場指南書は，実需取引のための書ではなく，比較的短期間に売りと買いを相殺することで損益を実現する投機取引のための書である。したがって，ここから導かれる市場観は，あくまでも投機家のそれ，ということになる。また，相場指南書では，スポット取引と先物取引とを明確に区別しない形で叙述がなされることも多いが，先に紹介した「商家秘録」の一節が示す通り，基本的には先物市場における投機取引を念頭に置いていると考えて差し支えない。先物取引の取引費用が，スポット取引のそれよりも低かったことも，その傍証となる（高槻（2012a）第2章）。

ここで観察した認識を，同時代の西欧にて展開した古典派経済学，あるいは現代経済学と対比する作業も将来的には見据えてはいる。しかし，この作業の前提として，まずは当時の市場参加者の言い分に耳を傾け，その主張内容をできる限り正確に把握するべきと考える。本稿がその土台を提供することになると期待して，本論に入る。

1　現存する相場指南書の概要

1.1　相場指南書の残存状況

近世において刊行された，あるいは刊行を必ずしも意図せずに作成された相場指南書の内，大坂米市場を取り扱っているものを列挙したものが【表1】である[5)]。

表題にしばしば見える「八木（はちぼく）」とは，「米」の字を分解すれば，「八」・「木」の2字となることに由来する米の異称であり，『日本国語大辞典』（小学館）によれば，最も古い用例として「小右記」（天元5年（982））が挙げられている。

相場指南書の成立年代に着目すると，いずれも18世紀半ば以降であることが分かる。単純に，それ以前のものが伝わっていないという可能性もあるが，享保15年（1730）に堂島米会所における取引が「勝手次第」となる以前においては，米切手先物取引はもとより，米切手取引についても「不実なる商い」として，公的に認められていなかったことに鑑みれば（高槻（2012a）第1章），18世紀中期以前には相場指南書が作成されなかったか，作成されても

表1　大坂米市場に言及した相場指南書一覧

表題	別称	著者・選者	形式	成立	版	刊行	書肆	写本	活字翻刻	備考
売買出世車 （うりかいしゅっせぐるま）	米穀売買出世車図式	東白	二巻	延享5（1748）		○			『秘録』／『文庫一』	
米穀売買出世車図式 （べいこくうりかいしゅっせぐるまずしき）	八木宝の市	赤松閣鬼望（平瀬徹斎）	二巻・図式一巻	宝暦8（1758）		○	赤松閣		『秘録』／『文庫一』	宝暦8年に，延享5年版（東白筆）の2巻に図式1巻を加えて刊行
八木虎之巻（はちぼくとらのまき）	羅羅（必用）八木虎之巻	猛虎軒主人	一冊	宝暦6（1756）	宝暦7／天明7／嘉永3	○	高木文英閣（大坂）／前川権兵衛（江戸）	○	『秘録』／『叢書二』	写本は「八木豹之巻」と合巻／『秘録』に採録されている版は，宝暦7年に江戸で刊行された版
八木龍之巻（はちぼくたつのまき）	売買極秘巻／羅羅八木竜之巻	見幾館主人	一冊	寛政10（1798）	享和元	○		○	『秘録』／『叢書二』	写本の表題は「売買極秘」
八木豹之巻（はちぼくひょうのまき）		猛虎軒主人	一冊	安永2（1773）		○		○	『秘録』／『叢書三』	写本は「八木虎之巻」と合巻
商家秘録（しょうかひろく）		大玄子	一冊	明和7（1770）		○	高木遷喬堂他（大坂）		『秘録』／『文庫八』	書肆名は神戸大学「住田文庫」所蔵本（神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ）に依る
三猿金泉秘録	八木三猿金泉秘録	牛田権三郎（慈雲齋）	一冊	嘉永4（1851）		○	鳴川猛之助	○	『秘録』	『秘録』によれば脱稿は宝暦5年（1755）で，その後写本が流布し，鳴川が嘉永4年に校訂上梓／国立国会図書館に「八木三猿金泉秘録：校正」（赤松忠七，1891年刊）の架蔵あり
米道大意（べいどうたいい）	米相場聞書	不詳	一冊	安永元（1772）か					『秘録』	国立国会図書館所蔵「大坂米売買之大意」（102-30）に「米相場聞書」の表題にて所収／
本間宗久翁秘録		本間宗久	不詳	寛政年間（1789-1800）か		×			『秘録』／『宗久翁』	
増補諸色相場高下伝		玉江漁隠	不詳	寛政13（1801）		○	四庫堂		『秘録』	
卜筮貨殖考 （ぼくぜいかしょくこう）		井上鶴洲（主殿）	不詳	弘化2（1845）		○	丁子屋源治郎他（京都）／広島屋伊助他（大坂）		『秘録』／『文庫八』	脱稿は文化13年（1816）春
芦政秘録 （ろせいひろく）		不詳	一冊	天明8年（1788）以降か				○	『文献集』	成立について，『国書総目録』は享保年間としているが，天明8年（1788）に松平定信が来坂した際に行った説諭について言及が見られる。この説諭部分が事後的に加えられて改版された可能性も否定できないが，ここでは天明8年以降の作成と推定する
難波の春 （なにわのはる）	八木のはなし	〔北越逸民〕	不詳	〔嘉永5（1852）〕					『文献集』／『近古』	『近古』所収の「八木のはなし」とほぼ同一内容であることから，著者，成立年代はそれに依った
稲の穂		不詳	不詳	嘉永6（1853）以降					『文献集』／『市史五』	成立について，『文献集』は天保13年（1842）以降としているが，ここで紹介されている先物取引の制度から嘉永6年以降と訂正
正空売買聞書		不詳	不詳	嘉永6（1853）以降					『文献集』	大坂東町奉行，一色直温の旧蔵書
米商秘説		不詳	不詳	嘉永6（1853）以降					『文献集』	大坂東町奉行，一色直温の旧蔵書
八木相場帳 （はちぼくそうばちょう）	古今八木相場帳	不詳	一冊	宝暦13（1763）		○	柏原屋五兵衛・同忠助（大坂）		『文献集』	
八木相場帳追考 （はちぼくそうばちょうついこう）		伏見屋加兵衛他	一冊	天明元（1781）		○	藤屋弥兵衛（大坂）		『文献集』	『古典籍総合目録』によれば天満宮版もあり

注）1．書誌情報は，原則として『補訂版　国書総目録』（岩波書店，1990年）と国文学研究資料館編『古典籍総合目録―国書総目録続編』（岩波書店，1990年）に依り，必要に応じて翻刻文を採録している文献の解題を参照した。
2．表題の読み仮名は『国書総目録』および『古典籍総合目録』に記載されている場合に，これを転記した。
3．「版」欄は，初版以外に確認されている版が存在する場合に，これを列挙した。
4．「刊行」欄は，刊行を意図して執筆されたものは「○」，自家所蔵を意図して執筆されたものは「×」，不明のものは空欄とした。
5．「写本」欄は，近世において写本の流布が確認されるものに「○」を付した。
6．「活字」欄は，当該史料を翻刻の上，掲載している書誌を掲示している。『秘録』は安達太郎（1941）『徳川時代 経済秘録全集』松山房，『文献集』は島本得一編（1970）『堂島米会所文献集』所書店，『文庫（漢数字）』は日本経済叢書刊行会編（1916-17）『通俗経済文庫』同会発行の各巻，『叢書（漢数字）』は早川純三郎編（1913-14）『徳川時代商業叢書』国書刊行会の各巻，『宗久翁』は早坂豊蔵（1910）『宗久翁相場全集』信義堂書店，『近古』は内藤耻叟・小宮山綏介編（1891）『近古文芸温知叢書 第十二編』東京博物館，『市史五』は大阪市参事会編（1911）『大阪市史 第五』大阪市参事会，をそれぞれ指す。

秘蔵され，世に広まらなかったと考えるべきであろう。あるいは，市場における値動きを記録，観察し，その運動法則を見出そうとする知的試みには，一定の時間を要したと見ることもできる。[6)]

著者・選者について，ほとんどが属性不詳であるが，記述内容からして，米相場に深く関わる人物であったことは窺える。また，書肆が判明するものについて言えば，対象からして当然であるが，ほとんどが大坂の書肆で出版されているものであることが分かる。なかには江戸や京都での出版実績のあるもの，または写本の流布が確認できるものもある。これらは相当程度に広く読まれた書として認識しておくべきであろう。

第2節以降でも触れるが，内容には相互に共通する部分も多く，先行して刊行された相場指南書を参照しつつ，後続の相場指南書が作成された可能性もある。

1.2　相場指南書の属性について

相場指南書を扱う上で留意すべきは，その属性である。誰に向けて，何のために作成したのかを把握した上で，その内容を参照すべきである。相場指南書というからには，市場参加者に向けて書かれたものが想定されてしかるべきであるが，【表1】に掲げた中にも，幕府に提出されたものが含まれる。それが「米穀売買出世車図式」と「米道大意」である。安達（1941）は，堂島市場関係者から幕府へ何らかの上申を行った際に，参考書類として提出されたとしているが（同書11頁），この点を間接的に裏づけるものとして，国立国会図書館所蔵の「大坂米売買之大意」（102-30）を取り上げる。

ここには「大坂米売買之大意」，「米穀売買出世車図式」，「書付二通」，「米相場聞書」（「米道大意」とほぼ同内容），「堂島米市場取扱方之聞書」，「国々登米性合善悪幷廻着月遅之儀附俵割之儀」，「米相場休日」という7点の史料が収録されており，いずれも謄写されたものである。「米穀売買出世車図式」と「米相場聞書」（「米道大意」）を除き，各史料の作成年代は不明である。また，全ての史料について謄写された年代や作成の経緯は不明である。

上記7点は，いずれも堂島米会所における取引の概要を説明するものとなっており，特に「書付二通」は，大坂町奉行所の地役人が，何らかの諮問に答える形で作成したものであることは明らかである。これを踏まえると，上記7点が，幕府に収められたものである可能性が高いと判断できる。[7)]

この内，【表1】には「米穀売買出世車図式」と「米相場聞書」（「米道大意」）のみを相場指南書として掲げている。残る5点が，為政者に向けて取引規則を淡々と記す性格のものであり，相場指南書として扱うことは適当ではないと判断したためである。「米穀売買出世車図式」は，そもそも相場指南書として出版されていたものが，参考資料として幕府に提出されたのであるが，「米道大意」については扱いが難しい。内容を見る限り，市場参加者に向

けて書かれているかのようであるが，為政者におもねるような記述が散見され[8]，為政者の目に触れることを強く意識して作成されたものであることを窺わせる。

幕府に提出されたものでなくとも，出版を前提に作成された相場指南書であれば，為政者の目が意識されていると見るべきである[9]。研究史における相場指南書の使われ方としては，筆者自身による研究も含め，特定の文言を摘出して紹介するという形であったが，個々の史料の属性について，可能な限りこれを明らかにした上で言及することが望ましい。第２節以下では，この点に留意しつつ，相場指南書の内，出版年代が古く，かつ広く読まれたと推定されるもの数点を取り上げて，大坂米市場の参加者が有した市場観を概観するが，分析に入る前に押さえておかねばならない点がある。それが陰陽五行思想である。

1.3　陰陽五行思想について

「米の高下も天地陰陽のめぐるがごとく」（「三猿金泉秘録」87頁），「陰きわまって陽生ずる」（「商家秘録」170頁），「陰陽自然の道理」（「宗久翁秘録」305，323頁）など，陰陽五行思想に強く影響を受けた記述は，相場指南書の属性，成立年代にかかわらず，散見される。

陰陽五行思想とは，天地開闢から宇宙森羅万象のあり方を網羅する，古代中国に生まれた思想体系であるが，その概略を吉野（1983）に従って整理する。

まず，原初の状態において，宇宙は天地未分化の混沌たる状態にあったが，この混沌の中から光明に満ちた，軽い澄んだ気，つまり「陽」の気がまず上昇して「天」となり，次に重く濁った暗黒の気，すなわち「陰」の気が下降して「地」となった，という。この陰陽の二気は，元来が混沌という同一の気から派生したもので，いわば同根の関係にある。そのため，陰陽二気は，互いに引き合い，親密に往来し，交感・交合する。

陰陽の交感・交合によって，天上にあっては太陽（日）と太陰（月），そのほか木星・火星・土星・金星・水星の五惑星など，種々の星が誕生する。太陽は陽の気の集積，太陰（月）は陰の気の集積と捉えられる。一方，地上にあっては，木・火・土・金・水の五原素が生じる。この五原素の作用が「五行」であり，「行」とは動くこと，めぐること，作用を意味する。つまり，五原素の作用・循環が五行なのであって，朝・昼・夕・夜も，春・夏・秋・冬の推移も，全てこの五行によって説明される。また，色彩，方位，惑星の動き，人間の精神，徳目，人間の内臓，に至るまで，様々な事象が五行に還元されて説明される。「地」にある人についても，「天」と密接不可分のものとして存在し，ここでもやはり交感・交合するものとして観念されるのである（以上，吉野（1983）20-62頁）。

吉野（1983）が指摘する通り，陰陽五行思想は古代以来，日本の民俗に深く浸透し，現在でも干支などの形で残っている。近世において，その影響が強かったことは指摘するまでもないが，専門外の筆者には，近世人，ここでは大坂米商が，朱子学を通して陰陽五行思想を

受容したのか（木下（2013））, あるいは全く別の経路で陰陽五行思想を受容したのかを判断する能力はない。この点は専門諸賢の判断を仰ぐとして, 陰陽五行思想が, 最も端的に表れている相場指南書として以下を挙げる。

【史料 1 】

陰陽五行の道理, あるいは物事さかんなれば衰へ, 衰(おとろえ)つくしてまた起(おこ)る, 実に売買高下の事考(かんがう)るに, 乾坤(けんこん)〔天地〕の間, 陰陽の理にはづるる事なく, もっとも, 五穀の多き・すくなきによるといへども, 人気をもって, 一年の間, 高下せずということなし, しかれば, 人の気分, 陽に進み登りつめたる時は, 陰来(きたり)て陰におもむき, 下るものなり, 又陰に下りつめたる時は, 陽来(きたり)て上がるものなり, この道理も月日の違(ちがい), 時節のちがひはあるといへども, およそこの陰陽の理にはづるる事なし（「八木虎之巻」133頁）

「八木虎之巻」は, 猛虎軒主人なる人物によって執筆され, 宝暦 6 年（1756）に大坂で出版された相場指南書であるが, その後も版を重ね, 江戸でも出版されていたことが確認できる（【表 1 】）。著者の属性は不詳ながら, 同一著者によって安永 2 年（1773）に作成された姉妹編「八木豹之巻」に,「予, 若年の時よりこの道に入ていまだ足る事を知らずといへども, 業に遊ぶこと, 年久し」（241頁）とあることから, 米市場に深く関わった人物であることは容易に想像される。重版, 江戸での刊行, 写本の存在, 姉妹編の刊行, といった諸事実からすれば,「八木虎之巻」は, 当時最もよく知られた指南書の一つであり, その主張内容は広く受け容れられたと見るべきである。網羅する内容は広く, 相場の大局的な運動法則に始まり, 相場に参加する上での心構えや, 相場の「くせ」を見抜くコツなどが紹介されているが[10], ここで着目するのは【史料 1 】に掲げた市場観を伝える部分である。

著者は, 相場の動きは「陰陽の理」に外れることはないと断言する。五穀の多寡や, 時期によって違いがあることは認めつつ, 究極的には「陰陽の理」から外れることのない, 高下を循環するものとして値動きを捉えようとしている。そしてそれは「人気」なるものが「陰陽の理」に従うことによると考えていた。「人気」については, 後に再び触れることになるが, ここでは人々の思惑と考えておきたい。人々の気が陽に向かう, すなわち人々が買い走ったとしても, また逆に売りに走ったとしても, それは決して永続しない。陰陽が循環するがごとく, 人々の気も循環するからであり, 相場も高下の循環をすることが当然であると受け止められている。

先に例示した通り, 陰陽五行思想に基づく市場観は,「八木虎之巻」以外の相場指南書においても散見されるため, 当時においては一般的な発想であったと言える。大坂米市場は, 17世紀初頭に, 豪商淀屋の店先で産声をあげたとされるが, それから百年余が過ぎた18世紀

中頃には，相場が高下の循環を繰り返すことが経験的に理解，共有され，そのことを説明する論理として，陰陽五行思想が援用されたものと理解されよう。

2　相場指南書に見る市場観

2.1 「天」と「人気」

近世の市場参加者が，相場の高下循環を「陰陽の理」によって説明しようとしたことは，先に見た通りであるが，同じ理屈が「天性自然の理」,「天道自然の理」などといった語によって説明されることもある。【史料 1 】で参照した「八木虎之巻」において,「陰陽の理」と同一の意が,「天道自然の理」,「天性自然の道理」といった語によって表現されていることがその証左である（132頁）。ここで言う「天」の役割を，今少し掘り下げたい。

【史料 2 】
相場の高下は，人の売買するに付て高下するといへども，是をなすは人力の及ぶ所にあらず，天地自然の道理なり，大富なる人，金銀の力をもって，あるいは買しめ，売出す時，一旦その米の高下ある様に見ゆる事ありといへども，始終にその功ある事なし，万民の人気，日本国より集まりてなす高下なれば，一人の力をもってなすは，たとえいかほどの大富なる人とても，ならざる道理を弁ふべし（「商家秘録」171頁）

「商家秘録」は大玄子なる人物によって作成され，明和 7 年（1770）に大坂の書肆から出版された相場指南書である（【表 1 】）。序文に「この書は人に教ゆるにあらず，わが覚書にして，二三子にあたふるのみ」（163頁）としていることから，本来は出版を意図せずに作成されたものであることが分かる。著者の属性は全く不詳である。「八木虎之巻」と同様に，相場の大局的な運動法則の説明に始まり，相場に参加する上での心構えや，値動きの法則性などを紹介しているが，ここでもやはり市場観に関する叙述に特化して検証する。

【史料 2 】によれば，相場の高下は「天地自然の道理」に基づいて決まるものであり，人力の及ぶところではないとされる。「大富なる人」が買い占めを行ったとしても,「万民の人気」が日本国中より集まって高下をなすため，一人の力で相場を動かすことはできないとしている。相場の高下は「天地自然の道理」に従うとする一方で,「万民の人気」が相場を動かすとしているからには，日本国中より集まる「万民の人気」が「天地自然の道理」に従うと考えていたことになる。ここにも天人相関を説く陰陽五行思想の強い影響を読み取ることができる。

ここまでは概ね「八木虎之巻」と同一の発想で貫かれており，論理構造は類似している。延享 5 年（1748）に成立した，現存するものの中では最も古い相場指南書である「売買出世

車」にも，「相場の直段は人にありて，その高下は人力のおよぶところにあらず，いはゆる天ものいはず，ひとをかりていわしむるといふものなり」（「売買出世車」40頁[11]）との記述が見られることから，「八木虎之巻」や「商家秘録」が，この見解を踏まえていた可能性も否定できない。また，大坂で広く読まれたと推定される「八木虎之巻」を，「商家秘録」が参照していた可能性も考慮せねばならない[12]。

しかし，全くの模倣がなされているわけではない。「商家秘録」は，「一人の力」と「万民の人気」とを別個のものとして対置し，この関係を明確に叙述する意思を示している。すなわち，【史料2】によれば，「大富なる人」の買い占めが，一旦は相場を動かすように見えることもあると，短期的には相場操縦が実現する可能性を肯定する。著者の理解に従うならば，この「一人の力」は「天地自然の道理」から乖離しており，ゆくゆくは屈服させられることになる。つまり，「一人の力」は，「天地自然の道理」に従う「万民の人気」の前には屈服せざるを得ない，ということになる。この点をより具体的に述べた箇所が以下である。

【史料3】
天ほど尊く，遠くて人間の自由にならぬはずの物なれども，それさへ，人の心大決定（けつじょう）すれば，一旦は天理にも勝事（かつこと）あり，しかれども，もとより人気にてしたる事なれば，ついに天理の通りにならで，叶はぬことわりなり，天理さへかくのごとくなれば，もちろん米の多少ありといへども，人気を押す事はならぬはずの事なり，この人気といふ物，さらばこしらえてそふしようといふて出来る物にあらず，自然と人の心が揃ふを，人気といふなり（「商家秘録」181-182頁[13]）

いわく「天」は人間の自由になるものではないが，人の心が「大決定（けつじょう）」すれば，一時的に「天理」に勝つこともあり得る。しかし，たとえ一時的に人の心が「大決定」して相場を動かしたとしても，人の心は「天理」に導かれるものであるから（天人相関），最終的に相場は「天理」に従うと，著者は考えたのである。

【史料2】で言う「一人の力」と，【史料3】で言う，人の心が「大決定」する状態とを対置させると，これらは一時的に相場を動かすことはあっても，「天理」に従うはずの人間がなすことであるから，いずれは「天理」に導かれることになる。「一人の力」による作為ではなく，「自然と人の心が揃ふ」ことによって「万民の人気」が形成され，天理に基づいた相場が形成されるのである。

「商家秘録」は，一時的に市場で形成される相場と，「天理」に基づく相場とを区別したという点で，それ以前に作成された相場指南書と一線を画している[14]。では，「天理」に導かれるとは，具体的にどのようなことを指すのであろうか。

2.2 「天」の実像

「商家秘録」の筆者は，先に掲示した【史料 3 】に続く箇所で，一旦は「人気」が相場を動かすことがあっても，「つづまる所の直は，米の多少につるるはずの事なり」と述べる（「商家秘録」182頁）。すなわち価格は，最終的には米の量によって定まるはずであると考えている[15)]。この考え方は決して「商家秘録」に固有のものではない。

【史料 4 】

およそ米交易の市は，数万の人気をもって，諸国の豊凶を平均して直段を立て，陰陽五行の道理にしたがひ，自然と毎日高下をすること妙なり（「八木豹之巻」240頁）

「八木豹之巻」は，「八木虎之巻」と同じ猛虎軒主人によって安永 2 年（1773）に作成された姉妹編ともいうべき書である。一定の人気を博したと考えられる「八木虎之巻」と併せた形で，写本が作成されたことも確認できるため（【表 1 】），「八木豹之巻」についても広く読まれた書であると見なしてよい。

猛虎軒主人は，数万の人気が諸国の豊凶を平均して価格を形成し，それが陰陽五行の道理に従うとしている。言い換えれば，諸国の豊凶が陰陽五行の道理に従うということになり，米の量が価格を究極的に説明するとした「商家秘録」と同一の発想に基づいている。

ここで留意すべきは，需要サイドが考慮されていないこと，そして供給を決定する要因として「豊凶」，すなわち天候ショックのみが考慮されていることである。

大坂米市場を需要サイドから分析した本城（1994）によれば，大坂米市場に向けられた需要は，商品作物生産に特化した畿内農村，瀬戸内農村の飯米需要という新たな要素を加えつつ，近世期中後期を通じて一貫して拡大を遂げていたとされる。しかし，かかる変化が長期にわたる，ゆるやかな変化であったとすれば，実需家ではなく，短期的な取引を繰り返す投機家に向けて作成された相場指南書の関心に含まれなかったとしても不思議ではない。また供給サイドにしても，「開発の17世紀」を経て，米生産量が頭打ちになっていたと考えられる18世紀半ばには（速水・宮本（1988）），社会全体の米生産力そのものに大きな変化はないと考えられていた可能性もある。

近世の米投機家たちが，究極的には「天理」が米価を決める，そしてその「天理」が司るものはつづまるところ「米の豊凶」であると，供給サイド，それも天候によって左右される要因のみで説明した背景には，米の需要構造と供給構造（米生産力）が，少なくとも短期的には変化しないとの前提があったのではないか。需要構造・供給構造を一定とするならば，米価を大きく動かし得る，唯一にして最大の要因は天候となる。そしてそれは確かに人力の及ぶところではない。近世大坂の相場指南書が，「陰陽五行の道理」（【史料 1 】），「天地自然

の道理」（【史料２】）なるものによって，市場の運動法則を説明しようとした背景には，かかる理解が存在すると，暫定的に把握しておきたい[16]。

2.3　相場指南書の役割

そもそも人力の及ばない「天理」なるもの，具体的には天候によって全てが決まるとすれば，相場の先行きを予想することは極めて難しい。それにもかかわらず，複数の相場指南書が作成され，種々の相場予測法や投資戦略が提示されたのはなぜか。それは，相場が究極的には「天理」に従うとしても，一時的には人為的な値動きが実現することもあると考えられていたからに他ならない。【史料２】，【史料３】で見た通り，「商家秘録」は，まさにこの発想に基づいていたが，他の相場指南書にも同様の発想が見出される。

【史料５】

相場の高下は人力におよばず，金銀の力にてもおよばず，天性自然といへども，ある時は一人の計略をもって高下する事もあれば，人気をはかること第一なり（「八木豹之巻」240-241頁）

「八木豹之巻」の著者，猛虎軒主人は，前作「八木虎之巻」においては明示的に論じられていなかった，「一人の計略」が相場を動かす可能性について論じている。先行して刊行された「商家秘録」と同様，あくまでも一時的なものにとどまる，との考えが示されているが，それだけに「人気をはかること」が肝要であると主張している点が重要である。この点にこそ，相場指南書の存在意義が見出されるからである。

「商家秘録」も，「天理」が導く値動きと，「人気」が一時的にもたらす値動きとを区別し，それぞれに注意を払った上で「思ひつき定まりたる時は〔中略〕すみやかにあきないすべし」（183頁）と説く。これこそが，「高下またたく間をまたず，貧富も同じく時の間にかわる」（「商家秘録」167頁），「米の直段の戦（いくさ）」（同169頁）とされた大坂米市場，特に先物取引市場で戦い抜く術であると説かれているのである[17]。

おわりに―今後の検討課題―

冒頭に述べた通り，本稿は予備作業をなしたに過ぎない。今回参照できたのは，18世紀中期に出版されたもののみであり，近世後期の相場指南書については一瞥も加えられなかった。したがって，ここで示した見解は暫定的なものであるが，今後の研究継続を約束して，寛恕を乞う次第である。

最後に今後の検討課題を述べて擱筆する。第一に，大坂米市場の性質についてである。堂

島米会所のスポット取引で売買されたのは，諸大名が発行した米切手であって，米現物ではない。また先物取引では，複数ある米切手の中から，取引期間毎に選ばれた銘柄を原資産とする先物が取引された。したがって，近世投機家にとっての「米価」とは，米現物の価格というよりも，米切手価格，もしくはその先物価格を指していると見るべきである。

米切手は，１枚当たり10石の米との兌換を約束する証券であるが，諸大名が大坂に在庫していた米の量を上回って発行される，いわば短期財務証券であった。米切手を提示された大名は，米現物を受け渡すのではなく，現金でこれを買い戻すこともあり，米切手は事実上の金融商品として流通していた。当時作成された諸史料に，米切手の価格が，米の豊凶のみならず，各大名の財政力，信用力によっても左右されたとの指摘が散見されることが，その証左である（高槻（2012a）99-100頁）。

しかし，本稿で取り上げた相場指南書において，米の価格，正確には堂島米会所で形成される米切手の価格，およびその先物価格は，究極的には米の豊凶によって決まると観念されていた。各米切手の発行主体である大名の財政力や信用力について，一切の言及がない。米の豊凶が大名財政を規定し，ひいては米切手価格を規定する。このように考えていたとすれば平仄が合うが，筆者の知見は，この疑問に答える水準には及んでいない。

第二に，大坂米市場の価格メカニズムを高く評価したことで知られる江戸時代の町人学者，山片蟠桃（ばんとう）（1748-1821）の市場観との対比である。山片蟠桃，通称升屋小右衛門は，大坂の大両替商升屋の大番頭として，大名貸に腕を振るったのみならず，その死の半年前に出版された主著「夢ノ代」において，地動説に基づく宇宙論や，徹底した無神論を唱えるなど，近代的合理主義思想の嚆矢と見なされている人物である（有坂（2005））。

「夢ノ代」において，蟠桃は大坂米市場の価格メカニズムを以下のように表現している。

> 浅間・島原の炎上，出羽の地震，中国津浪に至るまで，ことごとくひびきて，こたへざるはなし，神ありて告ぐるが如し，帥ありて指揮するがごとし，天より命ずるにあらず，人あつまりて比党するにあらず，西に買，東にうり，北にかひ，南にうる，あるいは上り，あるいは下り，あるいは保ち，あるいは飛ぶ，朝々暮々，入船入檄のたびごとに高下すること，響の声に応ずるがごとし，しかりといえども，その道二つ，いわく売，いわく買，その応二つ，いわく貴，いわく賤，唯これのみにして，天にあらず神にあらず，行と事をもって示すものはすなわち人気の聚（あつま）るところ，またこれ天なり，またこれ神なり，千人百人の力の及ぶべきにあらず（瀧本（1916）365-366頁）

日本中の天変地異にことごとく反応して価格に反映する大坂米市場は，「神ありて告ぐるが如し」であるが，蟠桃にとって，それは断じて「天より命ずる」ものではない。また人々が

談合して決めるものでもない。全ては人々が，売りと買いを繰り返すことによって導かれるものであり，千人や百人では到底操作できるものではないとしている。

蟠桃は，「天」や「神」なるものが市場を決めるのではない，と断言する。そのように見えるかのようであるが，あくまでも「人気の聚(あつま)る」ところによって値動きが実現すると考えている。蟠桃の画期性は，相場の動きを「天」なるもので説明しなかったことに求められるが，その意義を考察する作業は，今後の課題として積み残されている。

注

1）「売買出世車」（安達（1941）36頁）。以下，特に断りがない限り，引用史料の出典については後掲【表 1 】に譲り，当該資料を収録した書籍，具体的には安達（1941），島本編（1970）の掲載頁数のみを掲示する。各史料の属性については必要に応じて後述する。なお，史料中の文言を直接引用する場合には，適宜読点，ルビ，濁点を加えた上で，書き下し文に改める。また，読みやすさを考慮し，異体字・略字・俗字は常用字に改め，必要に応じて漢字を平仮名に改める。引用文中の亀甲括弧内の文字は筆者が加えたものと理解されたい。

2）1882年，大阪商法会議所において，旧幕時代の大坂における各業種の商慣行を整理した「大阪商業習慣録」が作成されることになったが，そこで主たる素材とされたのが「各商業者直接の談話」であった（『大阪経済史料集成 第二巻』解説参照）。記録資料も参照されてはいるが，大坂商人を律した慣行を成文化するには，聞き取り調査に依らねばならなかったことに鑑みるならば，堂島米会所において成文化された取引規則集が作成されなかったことは怪しむに足らない。

3）近世史研究者の深谷克己は，近現代の学問を物差しとして，前近代の人間を先進・後進と色分けすることに本質的な意味はないとし，むしろ，それぞれの時代に対応して構造化される精神の形質を知ることが大事であると指摘する（深谷（2010）19頁）。重要な指摘であるが，近現代の学問（ここでは経済学）の物差しに照らして，何が共通し，何が異なるのかを整理する作業そのものを放棄すべきではない。無論，先進性，後進性を評価するためではなく，近世人の思考をより正確に理解するために，である。

4）現代にも活かし得る相場訓や，難平(なんぴん)に代表される投資戦略を紹介するものとしての価値も，第三の価値として想定されるべきであるが，本稿の趣旨から逸れるため，ここでは取り上げない。稿を改めて検討すべき価値であろう。

5）『国書総目録』，『古典籍総合目録』に依る限り，活字化されていない相場指南書と思しき文献も散見されるが，ここでは対象に含めていない。また「宗久翁秘録」については出羽国酒田における米取引を念頭に置いて執筆されたものであるが，随所に大坂米市場を参照しているため，ここに含めることにした。

6）市場の運動法則を考察するには，価格の推移を何らかの形で記録することが必要である。堂島米会所における価格を記録した史料は数多く確認できるが，連続的にこれを記録したものとしては，18世紀半ば以降に作成されたものにほぼ限られる（高槻（2012a））。これも単純に史料の残存状況によるものかもしれないが，値動きを記録して分析するという知的試みは，18世紀半ば以降において一般化したと考えることも可能である。

7）ただし，実際に収納された年代については不詳である。「米相場聞書」（「米道大意」）の作成年

代が安永 2 年（1772）と推定されることから，少なくともそれ以降のことであろうが，後考に委ねたい。

8）例えば，明和 2 年（1765）に幕府が発令した米切手の通用保護令について，「ありがたき御掟にあらずや」と称讃している。

9）大坂を例にとると，大坂本屋仲間は，享保 8 年（1723）12月23日の大坂町触に基づいて成立したものであるが，この町触において，新刊の書籍について稿本を検閲すべき旨が指示されている（『大阪市史 第五』229頁）。なお，大坂の本屋は，この町触以前より，稿本の検閲を月番で務める仲間を組織していた（山本（2010））。株仲間解散令に伴い，天保13年（1842） 5 月に本屋仲間が解散した後は，大坂町奉行所において新刊書籍の検閲がなされることになる（『大阪市史 第四上』1539-1540頁）。

10）管見の限り，「八木虎之巻」は，「もうはまだなり，まだはもうなり」という，現在でも人口に膾炙する相場格言を紹介した最も古い文献である。ただし，そこでは「もうはまだなり，まだはもうなりといふ事あり」（145頁）と，既に存在する格言として紹介されていることからすれば，格言の成立自体は18世紀中期以前に遡ると言えよう。

11）ここで「売買出世車」が「天ものいはず，ひとをかりていわしむる」と表現している点に，朱子学の影響を読み取ることは牽強付会であろうか。朱熹は，『中庸章句』という著作において，「天命」を注解していわく「命猶令也（命はなお令のごときなり）」と，「天命」を「天令」と読むべしとしている。朱熹にとって「命」とは，特定の個人，それも「天」が特に認めた人物に降るものであるのに対して，「令」とは誰にでも降り得るものである。「天令」とは，「天」が降し伝える天の意志そのものであり，個々の人と物は，その意志を受けて自らの意志に据え直し（「天」の傀儡ではない），その意志を実際の行動に実現すると考えている（木下（2013）116-144頁）。後述する通り，「商家秘録」は「天理」に対して，一時的に「人気」が勝つこともあり得ると述べるが，人々は「天」に対して自律性を発揮できないというわけではない，とした朱熹の発想と通底するものがある。

12）ただし，「商家秘録」は出版を意図して作成されたものではないため，出版年（明和 7 年（1770））以前に作成されていた可能性もある。

13）ルビは，神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「住田文庫」所収の「商家秘録」より補った。なお，「人気」については読み仮名が付されていない。安達（1941）は「にんき」としているが，「じんき」と読む可能性も否定できないため，本稿では留保した。

14）この発想は，アダム・スミスが『国富論』において示した「市場価格（market price）」と「自然価格（natural price）」とを区別する発想を彷彿とさせるが（堂目（2008）167-172頁），後述する通り，近世投機家は，文字通りの「自然（nature）」によって価格の動きを説明しようとしているため，同列に論じることはできない。

15）『日本国語大辞典』（小学館）によれば，「麻につるる蓬」の語が掲載されており，語釈は「麻のようにまっすぐな物の中にまじって生えれば，蓬も自然に曲がらずに伸びるの意から，善良な人に交われば，その感化を受けて自然に善人になるというたとえ」となっている。これを敷衍して，本文では「米の多少につるる」を，相場は最終的には米の多少によって決まると解釈した。

16）今ひとつ不審な点を挙げるとすれば，これまでに参照してきた相場指南書の全てについて，幕府の市場介入に関する言及がないことである。幕府は，享保16年（1731）と宝暦11年（1761）に，

大坂で大規模な買米を実施している（高槻（2012a）第3章，高槻（2012b））。これらは政策的に需要を作り出す政策であるが，上述の相場指南書の作成者たちは，買米が実施されたことはもとより，2回の買米いずれについても，短期的には米価上昇に帰結したことも知っていたはずである。一切の言及がないということは，刊行物であるがゆえに，幕府の目を意識して意図的に言及を避けたと解釈すべきであろうか。

17）興味のある読者諸賢におかれては，【表1】に掲げた相場指南書を一読して欲しい。その実用性については本稿の関心外であるが，有象無象の投資戦術が書き並べられている。

参考文献

安達太郎（1941）『徳川時代 経済秘録全集』松山房。
有坂隆道（2005）『山片蟠桃と大阪の洋学』創元社。
大阪経済史料集成刊行委員会編（1972）『大阪経済史料集成 第二巻』大阪商工会議所。
大阪市参事会編（1910）『大阪市史 第四上』大阪市参事会。
大阪市参事会編（1911）『大阪市史 第五』大阪市参事会。
木下鉄矢（2013）『朱子学』講談社。
島本得一編（1970）『堂島米会所文献集』所書店。
高槻泰郎（2012a）『近世米市場の形成と展開――幕府司法と堂島米会所の発展――』名古屋大学出版会。
高槻泰郎（2012b）「江戸幕府米価浮揚策の研究――文化三年大坂買米を中心に――」『三井文庫論叢』第46号，75-130頁。
瀧本誠一編（1916）『日本経済叢書 巻二十五 夢ノ代』日本経済叢書刊行会。
堂目卓生（2008）『アダム・スミス』中央公論新社。
内藤耻叟・小宮山綏介編（1891）『近古文芸温知叢書第十二編』東京博物館。
日本経済叢書刊行会編（1916）『通俗経済文庫 第一巻』同会発行。
早川純三郎編（1913）『徳川時代商業叢書第一』国書刊行会。
早川純三郎編（1913）『徳川時代商業叢書第二』国書刊行会。
早川純三郎編（1914）『徳川時代商業叢書第三』国書刊行会。
早川純三郎編（1929）『日本随筆大成第三期第三巻』日本随筆大成刊行会。
早坂豊蔵（1910）『宗久翁相場全集』信義堂書店。
速水融・宮本又郎編（1988）『日本経済史1 経済社会の成立 17-18世紀』岩波書店。
深谷克己（2010）『田沼意次――「商業革命」と江戸城政治家――』山川出版社。
本城正徳（1994）『幕藩制社会の展開と米穀市場』大阪大学出版会。
宮本又郎（1988）『近世日本の市場経済――大坂米市場分析――』有斐閣。
山本秀樹（2010）『江戸時代三都出版法大概――文学史・出版史のために――』岡山大学文学部。
吉野裕子（1983）『陰陽五行と日本の民俗』人文書院。